

井上農園(南区下瀬)は1973年の創業以来、造園や観葉植物のレンタルなどを手掛けています。コロナ禍をきっかけに、新規事業として2023年からバナナの温室栽培にも取り組み、今では安定して収穫できるようになりました。バナナは料亭やふるさと納税用、住民向けなどに販売しています。市内でバナナを栽培するようになった経緯や事業化の意義について、創業者の孫にあたる井上喬之専務を取材しました。

■観葉植物用の温室をバナナ農園に
井上専務は「20〜21年はコロナがいつ収束するのか分からず、先が見えない状況で、何か新しいことを始めようとしていました」と振り返ります。

その頃はコロナ対策や休業などの影響で、観葉植物をレンタルしていた病院やレストラン、事業所などでレンタルを止める顧客が続出。売り上げが大幅に落ち込んでいました。「新規事業を社内検討するうちに、利益を追求するよりも、困っている人々に何か還元できる事業がよい」と話になりました。妻が宮城県出身で、東日本大震災では被災者が食べ物に困っていた、という話も聞いていました(井上専務)。

話し合いの結果、観葉植物用の温室3棟を「バナナ農園」に転用するというアイデアが生まれました。

■手作業で害虫駆除、夏場の温度管理に苦労

栽培する品種は「グロスマッシュエル」という、皮が薄く柔らかくて甘みのある希少な品種です。生育途中でも皮ごと食べられることから、非常食にも向いてい

ることが、グロスマッシュエルを選んだ理由でした。井上専務は22年9月から3カ月間、岡山のバナナ農園で同品種の栽培方法を学んだそうです。

そして翌年3月にはバナナの栽培を本格的に開始。「子どもにも安心して食べさせられる食材を提供したい」という思いから、無農薬で栽培しています」と説明します。

バナナの温室栽培で地域貢献

災害時の非常食にも活用

現在、3棟の温室で90株のバナナを栽培。1株から150〜200本ほどのバナナが収穫できるといいます。卸値は750円程度としています。

ただ、そもそも無農薬栽培であるため、「害虫の駆除では葉に付いたハダニやカイガラムシなどを一枚一枚、布を使って手でふき取っています」といった苦労もあるそうです。しかも、バナナの栽培は



(株)井上農園 専務取締役

井上 喬之さん

25〜30度が適温とされる中、夏場の温室は放っておくと最高で45度程度まで上昇することも。そのため、夏場は窓を開け、大型の扇風機を何台も回してハウス内の温度を下げなければなりません。

■収穫体験やジャムづくり

こうして収穫するバナナですが、井上専務は「もともと、利益を出そうとは考えていないため、収穫した分がすべて売

れたとしても、収支はトントンです」と明かし、生産量を大幅に増やす計画はないと言います。

それよりも、いつ大地震などの災害が発生してもバナナを供給できるよう、バナナの株ごとに生育時期をずらし、1年中収穫できるよう工夫を凝らしています。そして今後は相模原市や神奈川県、それ以外の市・県とも、被災時に義援金代わりのバナナや必要物資を無償提供する防災協定を結び計画です。

これまでも、地元の子ども園などにバナナを配っていましたが、今年は収穫体験やジャムづくりなどにも取り組む意向で、地域貢献を積極的に行っていくとしています。